

繁殖牝馬の 排卵障害について

静内診療所 池田寛樹

8月に入り、繁殖シーズンは終わりましたが、今回は繁殖牝馬の排卵障害について少し詳しくお話したいと思います。

発情期において、正常であれば卵胞が発育し、やがて排卵することで、黄体が形成されます。受精していればそのまま妊娠の維持、不受胎であれば約3週間の周期で排卵を繰り返します。しかしながら、卵胞が発育し、発情兆候は見せるものの、排卵のタイミングで正常に排卵が起こらず、無排卵卵胞 (AF ; Anovulatory Folicle) を形成することがあります。AFは出血性無排卵卵胞と呼ばれることもあります。排卵するタイミングでのホルモン異常がAF形成を引き起こすとされており、排卵して卵子を放出することはないため、不受胎の原因になります。また、ホルモンバランスの異常により、その後の発情周期が乱れることがあります。その要因に関しては、年齢やストレス、発情誘起や排卵誘起のためのホルモン治療などがありますが、突発的に起こることが多いと思います。ただ、年齢に関しては、1つの繁殖シーズン中に、10歳以下では7.6%、11-19歳では19.6%、20歳以上では51.2%が、1度はAFを形成するという報告があり、高齢馬では発生リスクが高いことがわかります。また、1シーズン中に複数回、AF形成を繰り返す馬もいます。稀ではありますが、繰り返しのAF形成により1シーズンを通して、交配すら行けないと

いったことも起こりえます。

AFは2種類に分類されます。1つは排卵しないものの、後に黄体化するタイプです。このタイプであれば、すべてが上手くいくわけではないですが、プロスタグランジン (PG) 製剤による治療の対象となります。もう一つは、黄体化せずにそのまま残存するタイプです。こちらの場合は、有効な治療方法はなく、次の卵胞が発育するのを待つしかありません。AF自体は1~3週間で消失していくことが多いですが、発情周期が乱れることが多いため、次の発情が来るのを注意深くモニタリングしていかなければなりません。1番最初のAF形成を交配前に予知することは難しいため、交配後のエコーによる排卵検査によって排卵を確認することは重要です。エコー検査では様々なAFの特徴的所見が得られます (図1,2)。



図1：黄体化したAF
通常の黄体に似た白色構造物が確認できる。

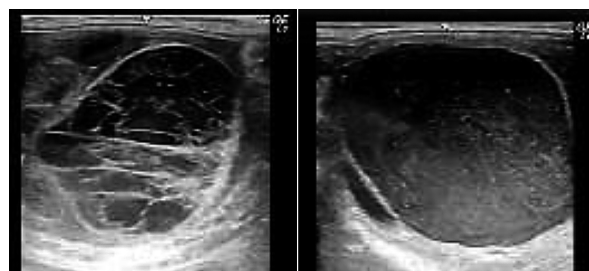


図2：黄体化しないAF
卵胞内が網目状になったもの (左)、血液で満たされ濁って見えるもの (右) が確認できる。